戦中・戦後の生活

戦時中の青春

荒木田　ヒデ（金　堀・73歳）

戦時中の思ひ出と云えば辛い事、悲しい事等の暗いイメージの思ひ出しか浮かんで来ないと思ひます。でも私には桃色の人生でも有りました。

私も長女をみもごり危険な東京を離れて主人の妹を頼り大分県の日田市と云う所で主人と辛い半年間の別れを耐えて昭和二十年の四月十一日朝三時、其の瞬間は空襲警報が鳴り大村飛行場を爆げきに行くアメリカの艦載機がブンブンうなり声を上げて上空を飛んで行きました。其の中で私はこんしんの力を振りしぼって無事女の子を産みました。産后の肥立ちは悪く乳腺炎にかかり手術の為入院したり産じょく熱にかかったりで苦しみました。主人が迎えに来て呉れ一週間后に日田を離れましたが、其の僅かの間に最后の東京大空襲が昭和二十年五月二十五日に有り千駄ケ谷に有った私共の財産が凡て灰に帰してしまひました。お乳の出ない私は其の后本当に苦労しましたが、娘も生命運強くどうにか生き延びて現在に至って居ります。こんな運命に逢った私ですが今でも私の心の奥に残って居るほのかな甘ずっぱい思ひ出を書こうと思ひます。

日本橋のT会社のタイピストとして働いて居った昭和十四年の九月会社の運動会が豊島園で開催されました。其の日思ひ掛けなく親友の大橋さんの課の人で東京工大を出たと云う彼に巡り逢ひました。私達三人は運動会には参加せず池のボートに乗ったり、其の頃有ったウォーターシュートに乗って歓声を上げたり、御馳走を頂き乍ら時の経つのも忘れて楽しい話しに夢中でした。

其の后会社に帰ってからも仕事が終れば彼は（Oさん）かならず待って呉れ、銀座にお食事に行ったり、喫茶店でお茶を飲み乍ら会談し、又映画を見たり（会計は全部彼が払って呉れました）毎日心踊る日日を過しました。然し悲しい事に当時の国の掟で昭和十五年の一月には彼は入隊しなければならない運命でした。どんなに好きな彼でも私の手許につないで置く事の出来ない時代でした。私と大橋さんは十二月から彼の為千人針の胴巻を作って差し上げる事にし、白木屋デパートの前に立ち又昔の服部時計店の前にも立って皆さんにお願ひしました。縫って下さる方の中には五銭銅貨（死線を超えるの意味）をつけて下さる方も四、五人有りました。此の服部時計店前で一生懸命やってる姿を当時の日本の名写真家木村伊兵衛氏が写して下さったのを知りませんでした。昭和十五年の一月四日の読売新聞の朝刊に「春の千人針」と云う題名で写真が写って居り会社の皆から大騒ぎされました。早速読売新聞社に行き木村氏のスタヂオをおそわり西銀座に有った事務所を尋ねてお逢ひしたら三枚の写真をアップにして下さいました。とても記念になり思ひ出です。

昭和十五年一月十日頃彼は世田ケ谷の聯隊に入隊し一月末には外地に出

征するとの事で課の人全部と私も一緒に最后の面会に行きました。これでもう彼とも逢う事が出来なくなるのかと思うとたまらなくなって「皆さんさようなら」と云って駈け出して行く彼に思わず「Oさん行っちゃ厭」と云って抱き付き泣いたのを思ひ出します。Oさんは優しく私の肩を叩き「元気でね」と云ひ乍ら兵舎に向って駆けて行きました。其の后一ケ月して彼から手紙が着きました。ソ満国境に流れる黒龍江の河口に有る孫呉と云う町に着いて警備に当って居るとの事でした。酷寒冷下三十度の土地でおしっこすれば側から棒になるとの事でした。でも元気で軍務に服して居るから安心して下さいとの便りでした。私も慰問袋を送ったり手紙を書いて彼を励ましましたが、昭和十六年十二月八日大東亜戦争が始まり戦局は益々拡大して行くばかりで戦地に行った人々は何時帰れるか判らない状態となりました。私も本当に好きな彼では有ったが諦らめて現在の主人と結婚しました。今老人ホームに入り静かに暮らして居ると若い頃の色々な楽しい思ひ出が次々と浮んで参ります。

私には戦時中の苦しみなんて余り浮かんで来ません。気が付くままに書きました。

